
世界神の楽園物語

燐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界神の楽園物語

【Nコード】

N 8 6 1 4 M

【作者名】

燐

【あらすじ】

ここは……無限にある世界の中で最初に出来た世界“元界”そこには色取り取りの自然が育つ人間や動物ですら居ない世界……その中では全ての世界の神の頂点に降臨する世界神の三角……次元神・創造神・破壊神・更にその上の終わりと始まりの神・終始神とその他の者が住む……世界……その世界でおくる最初にシリアス後は全部コメディのどんちやん騒ぎ物語！

では、始まり!!!

色々と変更しました

光無き世界（前書き）

作者「二作目」とりあえず最初はシリアスだけど後は全部コメデ
イーの物語です」

光無き世界

……暗い……

……暗い……

一体ここは何処なんだ？

そこは暗黒の世界または裏の世界……

ん……？何か聞こえるこの声は……雪乃

助けてよ……痛いよ……お兄ちゃん……痛いよ……何で……何で……

雪……乃……？

目の前に居るのは体のありとあらゆる場所から血を流す……最愛の妹

何で……私を……■したの？

え……？

何で？何で？何で？何で？何で？何で？何で？何で？
何で？何で？何で？何で？何で？何で？何で？何で？
何で？何で？何で？何で？何で？何で？何で？何で？

……俺が……雪乃を？

その手にはいつの間にか刀が握られていた

うん……お兄ちゃんは……私の体を刺して刺して刺して■し
たんだよ？
すつつごく痛かったんだよ

俺が……俺が……

ねえ……お兄ちゃん？

つつ……！

金縛りの様に体は動かなかった

お兄ちゃん……苦しいよ……助けてよ……痛いよ……

あっ……あっ……

お兄ちゃんも……此方においで……

ひっ……！

無数の小さな手は信じられない力で沈められていった

はっ……離せ！

お兄ちゃんの人殺し……

えっ……

お兄ちゃん……辺りを見て何も思わないよ

なっ……何よっ……！？

辺りには沢山の肉の塊が埋め尽くされていた……

あっ……あっ……

これは全部……お兄ちゃんがやったんだよ？

うっ……ゲホッゲホッ

おもわずそこで膝を着き嘔吐した……

お兄ちゃん……

ナンデワタシヨコロシタノ？

光無き世界（後書き）

作者「暗い……とりあえず暗いのが二話か三話くらい続くといい
すが後は全部コメディーでいきます！」

感想など、どしどし下さいそれが私の力になります！
では次回もお楽しみに」

絶望からの光（前書き）

作者「今回もシリ阿斯あります……相変わらず駄文ですがどうぞ！」

絶望からの光

ここは世界神が住む……『元界』……その中で巨大な屋敷の中に一人の神でもない一人の少年が寝ていた

「……知らない天井だ」

その少年はゆっくりと目を開き知らない天井を見ていた

「……俺は……！」

そう呟いた直後頭に莫大な情報が流れ込んできた

「あっ……ぐっ……」

少年はベッドの中で頭を押さえながら激痛に耐えた……そして……

思い出した

「……俺は……俺の名前は『紫乃崎 紅』」

少年の名前は紫乃崎 紅……自分の欲のために殺戮を繰り返した夜
天 零の元の人格

紅「俺は……何てことを……！！！」

拳を強く強く握りしめた血が流れようと関係ない……自分が喰ら
ってしまった16の世界の全ての生物と比べたら……こんな痛み

紅「ぐっ……くそおお……くそおお……」

晴天の様な蒼色の瞳から雫が何度も流れ落ちた

「……過ぎてしまった事は変えることは出来ないよ……紅」

その握りしめた手のひらに優しい……天使の様な手が紅の手を包んだ

紅「……空……か？」

空「うん……」

包んだのは紅を助けた紅の親友、破壊神『夜天 空』だった

空「思い出した？……色々と」

紅「……ああ」

二人の間に……沈黙が走る

紅「何も……聞かないのか？」

空「もう……知っているから……」

紅「っ……」

紅「なあ……空……」

空「ん？何？」

紅「俺は……これからどうするんだ？」

空「……そうだね……その所の説明は皆とお話するから……付いてきて……立てる？」

紅「……ああ……問題ない」

紅はゆっくりとベッドから抜け出し立った

空「行こう……」

紅「ああ……」

重たい空気の中二人は何処かに歩いていった

空「ここだよ」

紅「うわぁ……」

数分歩いた所で空は立ち止まった。紅と空の前には七色に光る宝石が幾つもの付けられた豪華な扉があった……紅はその豪華さに少し退いた。

コンコン……

空「入るよ？」

???「いいよ〜」

中からは明るい声が聞こえた……気配は約四人程度か……

空「失礼しm」空ああああ!!!!「ちょ!?!父さん!?!」

空が扉を開けた瞬間迅雷の如く誰かが空に抱きついた……

空「父さん……くっ……苦しい……！」

???「空よ私のことは“パパ”と何時も呼んでくれと言っているだろう」

空「……………」

イクス「アルゼント様……空様が気絶しています」

アルゼント「なっ……！？空！？空！？空！？空！？空！？空！？……だっ……誰だ……！……空を気絶させた奴は……！！（怒）」

その時……四人の心は……

???「（父さん……）」

呆れた顔をする紫色の髪と目をした20歳くらいの美青年……次元神『クロウ・ラーズディング』

???「（ははは……パパは相変わらず……だね）」

内心、苦笑いする蒼色の髪に翠色の目をした18歳くらいの美少女
……創造神『星輝 聖奈』

アルゼント「空あああああ……！！！！！！」

……白髪に黒目をした30歳くらいのダンディーな爺……終始神『
アルゼント・ユグドラシル』

後は……破壊神『夜天 空』が居るのだが……

空「きゅゅん」

頭に天使の輪を作りながら気絶していた

その中で紅はイクスに話しかけた

紅「イクス……さん」

イクス「……貴方が言いたいことは分かります……大丈夫です既に
完治しました」

紅「……………」

アルゼント「え〜、ごほん！」

あれから一時間ぐらい時間を費やしその場を抑えた

クロウ「やっと、話が出る……………」

聖奈「にやは……………」

空「三途の川が見えた……………」

イクス「紅茶をどうぞ」

紅「あつ…ありがとう」

アルゼント「さて……君は紫乃崎 紅君……でいいね？」

紅「はい……」

アルゼント「君は自分がしたことを……自覚しているかい？」

紅「……はい」

クロウ「君は十六もの世界を喰らった……」

聖奈「その罪は……余りに重いよ……」

紅「……はい……自分はもう死ぬ覚悟です」

もう……帰る故郷も世界も全て俺が喰らった……並ば俺は死んでこの罪を……

空「間違っているよ……紅」

紅「えっ……？」

空「“人間”の領域の罪ならまだしも紅の罪は“人間”の罪を圧倒的に凌駕しているよ？」

“人間”程度の罪なら罰金とか牢獄行きとか死刑とかで済むかも知れないけど……紅の罪は“世界”その存在その物の……罪だよ」

紅「……………」

クロウ「悪く言えば『君の存在を殺しても“その程度”では罪は償えきれない』……と言っ意味だよ」

紅「っ……………」

……そうだよな……数百億……以上の……生物……人を殺しておいて俺と言う“たった一人”の存在が消えたも……全然償えないな……

紅「なら……俺は……俺の……罪は……どう償ったらいんだ……！？」

その頬に滴を流しながら今にでも消えそうな声で……紅は問いただした

.....

.....

.....

.....

...

アルゼント「お前の罪は永遠に償えない」

紅「.....そう.....ですか」

.....それは.....余りにも.....残酷な真実.....

空「紅.....」

紅「.....何？」

空「突然だけど俺の現人神にならない？」

現人神……それはこの世に人間の姿で現れた神を意味する言葉……

紅「……現人神？」

空「俺の従者みたいな者だよう見えて結構俺、仕事がいりいろとあつて忙しいんだよね……そこで紅にも手伝ってほしいんだよね……」

紅「……それと……俺の罪とどんな関係が？」

空「……そうだね……正直、紅“だけ”では罪は永遠に償うことは出来ない」

“だけ”の部分をやと強調したアルゼント達はだけの部分に隠された意味に感ずきクロウと聖奈は声をあげた

クロウ&聖奈「空！（ちゃん）」

空「兄さんと姉さんは黙って！」

クロウ&聖奈「っ!?!」

空からはあふれた覇気により二人は黙った

紅「……………」

空「紅が現人神になれば紅は……正真正銘の神になれるし……紅の罪は半分になる」

紅「!?!」

空「残りの……半分の罪は俺の罪になっちゃうけどね……」

紅「なっ!?!」

空「フフ……そんなにびっくりすること?」

紅「空!お前……………!」

空「頼りない親友をほっとく訳にもいかないしね……これめちゃくちゃ大きい貸しだよ」

紅「……………」

信じられない顔で空を見つめる紅

空「実はね……幻影かも知れないけど……雪乃に会ったんだ」

紅「……あつ……」

空「雪乃に頼まれちゃんでね♪

まあ……俺の現人神になることは……完全なる不老不死になること
だけだね」

紅「……雪乃……！」

お兄ちゃん駄目だよそんな所で寝ちゃったら風邪引くよ〜

お兄ちゃん！これ買って！

お兄ちゃん！空お兄ちゃんが遊びに来たよ♪

お兄ちゃん！一緒に行こう♪

お兄ちゃん……ありがとう！

紅の頭の中には温かくも幸せだった雪乃との記憶が流れていった……
……記憶が流れば流れるほど紅の頬には滴が流れ落ちていった……

もう！お兄ちゃんは私が居なきゃ全然駄目だね！

……ああ、そうだね俺はお前が居なきゃ駄目な男だよ……

紅「……空」

空「決めた？」

紅「ああ……俺は雪乃の為にもそして俺の為にも自分の罪を紫乃崎
紅としても夜天 零としても……償う……償って見せる！！！」

空「それでこそ俺の親友だ！兄さん、姉さん、父さん反対意見は？」

クロウ「まったく……勝手に決めて……分かった空が決めたことだ
俺は賛成するよ」

聖奈「クス……やっぱり空ちゃんは空ちゃんだね分かったよ私は賛
成するよ」

アルゼント「……空……」

絶望からの光（後書き）

作者「空……てお人好しだね」

空「お人好しか……俺は人じゃないからどちらかと言つとお神好しと言つた方が正しいかもね」

紅「空……本当にいいのか？」

空「気にしなさんな」

いつかきつちり借は還してもらうつから」

紅「ははは……頑張るよ」

作者「さて……次回！『修業！それは修羅の道……』お楽しみに」

修行……それは修羅の道（前書き）

作者「すみません駄文& a m p・超短いです……あと実際は修行等
しません」

修行……それは修羅の道

空「さて……紅！早速修行するよ〜」

紅「……………ああ」

空達が来たのはただ無限に広がる広大な砂漠が広がる……世界……

紅「何からするんだ？」

空「そうだな……まずは契約からかな？」

紅「……………契約？」

空「紅が現人神になるための契約だよ」

紅「……………ああ」

空「簡単にすむからちよつと待ってね」

空はポケットから小型ナイフを取り出し薄く指を切った……指から

は一筋の血の雫が砂漠の地に落ちた

パアアア…………

紅い光を放ちながら魔法陣が展開された

空「終極神化…………デストロイア」

紅「…………ああ…………」

俺は空に渡されたナイフで指を小さく切り血の雫を落とした

パアアア…………

紅い魔法陣は強く光ながら紅に吸収されていった

空「終極神化解除…………ふう〜〜、どう？体の調子は」

紅「力が…………力が溢れてくる」

空「それが神が使える力……神力だ」

紅「……神力」

空「……そう……万物ですら操ることが出来る力……」

紅「……そんな力……が」

空「それが……世界神の故の力……」

ゴオオオオオオオ……！！！！！！

轟音が辺りを響く……真紅の魔力が空を包み完全なる破壊神……デストロイアとなった

紅「……ああ……」

紅はその莫大な魔力と神々しい姿に魅了されていた

空「……我は……万物を破壊する……破壊神なり……汝に問う……」

紅「……なんだ？」

空「……最凶の……力を手に入れた……汝の思い……は？」

紅「酷く後悔しているよ……」

空「それは……何故か？」

紅「力を手に入れることは……同時に責任を負うこと……俺は責任を負いきれなかった」

俺は……力を……復讐する為の手に入れて……その力に吞まれた……
……けど俺に……あの時に……自分を止められていたら……あの惨劇は起こらなかった……

空「並ば汝はどうする？」

既に起きたことは……変えられない……未来は絶対に変わることは無い……罪は永遠に存在する

紅「これからは……俺は強くなり今度は“人を殺す力”では無く“人を守る力”を手に入れる……」

空「……人を守る……それは正しかもしれない……しかし全てを守ることはまた何かを傷つけることになるぞ？」

紅「……それでいい……俺には正直、本当の意味で誰を助けるべき人が助けないべき人が分からない……それには“答え”は……無いかもしれない……けどそれを自分で決めることは出来る！」

空「並ば……貴方の信念にもとずき……自分の道を……突き通すがいい……そのナイフで指を切り血を一筋落とすがいい……それで契約は成立し……貴方は幻影の力を手に入れることが出来る……」

紅「幻影の力……か」

空「そう……実際にはないが目に見えるようなこと……言わば幻」

紅「……」

空「使い方を誤れば……恐ろしいよ……」

一言だけ空は素で話しかけた……それにはいろいろな感情が込められていた……

紅「俺に……迷いなど無い!!!」

紅は空に受け取ったナイフで指を小さく切り血の雫を地面に落とした

パアアア……!!!

再び紅い魔法陣が展開され更に強い光を放ちながら二人を包んでいた

空「契約はこれで完了した……」

紅「さっきと……あまり変わってないけど？」

空「そりゃ……まあね」

紅「さっきの力……神力？だっけ……どう使った？」

空「それをこれから扱う修行するの!」

紅「確か……俺が持っている力は……」

空「霊力、妖力、魔力、神力……と普通は……まず異変だね」

紅「因みに……どれくらい？」

空「ん……紅の全ての力…霊力、妖力、魔力、神力は凄いことながら世界最強クラスだよ」

紅「え……えっと……」

空「完全に扱うことが出来るようになったら……そこら辺の神に負けわまないよ」

紅「……チート」

空「アハハハ（汗）取り敢えず武器を紅の武器用にこれを渡してくね」

空「取り出したのは……」

柄の部分から先まで真っ黒に染まった剣

穂が5本に分かれた黄金の槍

禍々しくどこか神々しい赤黒い剣

紅「……これは？」

空「ん~~~~

血を求める魔剣『ダースレイブ』

轟く五星『ブリューナク』

鮮血に染まった約束された勝利の剣『ブラッディ・エクスカリバー』

……俺が昔使っていた宝具だよ」

紅「嬉しいけど……いつ……いいのか？」

空に渡されたのは普通では存在することが奇跡な宝具な武器を渡され紅は冷や汗を掻いていた

空「いいいいいよ、使わない道具はやっぱり誰かが使った方がいいし……俺にはこれがあるし……」

永遠に約束された勝利の剣『エターナル・エクスカリバー』

絶世の名剣『デュランダル』

乖離剣『エア』

があるから」

紅「……へっ……へえ〜」（汗）」

紅は冷や汗を掻きながら頷いた……どんな武器が聞いたら負けと心
の中で思いながら

修行……それは修羅の道（後書き）

作者「凄いな〜宝具のオンパレードや……」

紅「……普通に危ないか？」

作者「そうだね……普通は人間が扱う筈の道具だからね……神……しかもその頂点にいる神が使ったらどんなになるのだろうか……」

空「そうだね……一度何もない世界で乖離剣『エア』を真名解放して天地乖離す開闢の星『エヌマ・エリシュ』を放ったら世界が一刀両断しちゃたことがあったな〜」

作者& a m p・紅「（……やばくないか……それ）」

空「まっ……とりやえず次回また読んでね♪」

作者「気づけば……もう終わされたし!？」

紅「……アハハ（汗）」

キャラクター紹介（前書き）

作者「キャラクター紹介です。ネタバレ多数です」

キャラクター紹介

夜天^{ヤテン}
空^{ソラ}

身長：168cm

体重：59kg

年齢：推定100億以上？

武器：血刀・終夜

絶世の名剣『デュランダル』

乖離剣『エア』

永遠に約束されし勝利の剣『エターナルエクスカリバー』

無名の武器×1億本程？

腰まである金髪に銀眼と綺麗な女顔の美少年？（男だが99%の確率で女性と思われるしまう）

町の中を歩けば男性も女性も思わず振り向いてしまうほどの美しい世界神であり無敵と言うより反則級^{チート}の強さまず同じ世界神でも空に勝てる世界神は次元神か終始神しかない（創造神は世界神の中で

最弱)

基本的には平和主義だが何かと興味を抱くものには徹底的に首を突っ込む

過去の出来事のせいかな今でも人間を憎んでいる(但し子供、女性にはとことん甘い)

自然が好きでとくに花が好きで花を育てている……因みに空の育てた花を一輪でも踏んでしまうと……恐ろしいことが起きる

今は親友の紅を弄ることが好きらしい

戦い方は基、英雄王にそっくりそのまま破壊意外に空間を操ることが出来るからこそこの戦い方が可能である(但し打ち出す剣は宝具では無く只の無駄に硬い剣)

紫乃崎^{シノザキ}
紅^{コウ}

身長：170cm

体重：60kg

年齢：100歳以上らしい

武器：轟く五星『ブリューナク』

血を求める魔剣『ダインスレイブ』

鮮血に染まった約束されし勝利の剣『ブラッディエクスカリバー』

雪の様な白銀髪に晴天様な蒼色をした中性的な美少年

元「鮮血の殺戮者」こと『夜天 零』

零の時に世界を喰いあら去った為か魔力等の力が半端無い

困っている人がいたら真っ先に助けに行く……かなりのお人好し

空の現人神になってから幻影を操ることが出来る

実は紅の家……紫乃崎家は吸血鬼の末裔で満月の夜のみ吸血鬼に変化出来る紅の場合は二m程の蝙蝠の様な翼が生え爪と歯が伸び髪は漆黒に変わり目は真紅に染まる（因みにこの時は幻影を具現化することが出来る）

戦い方はスピードで勝負する速攻派

槍を中心に戦うが本気を出すと剣を使う

イクス

身長：176cm

体重：65kg

年齢：100億歳以上但し空よりは年下

武器：素手

空の使い魔であり執事でもあり邪神でもある何時もは人の姿（人の姿じゃないと喋れないため人の姿でいる）
闇と影を司る神でかなり強い
空に永遠の忠誠を誓っている

星輝^{セイキ} 聖奈^{セイナ}

身長：165cm

体重：…肉体的に死ぬのと精神的に死ぬのとどっちがいい？

年齢：永遠の18歳だよ♪（既に兆を越えている）

武器：輝光天神槍

100人の中なら100人美しいと言われる程の超美少女
蒼色の髪に翠色の目をしている

空の姉に当たる神であるが生活面でも戦闘面でも負けてしまう可哀
想な神

しかし空に溺愛しているのは間違いない
何でも創造する力があり世界ですらも直ぐに創ってしまうほど但し
最近部屋に閉じ籠りゲームばっかやっている（本人結わく働いたら
負けるような気がするとか変な言い訳を連発するためクロウ等に呆
れられている）

戦い方は創造の力を生かした中距離の攻撃、波状攻撃等を得意とし
ている（創造した武器を投げたり使ったり撃ったり）

クロウ・ラーズディング

身長：175cm

体重：63kg

年齢：此方も兆を越えている

武器：秩序を守りし宇宙の鎌『ガーディアン・コスモス』

紫色の髪と目を持つ超が着くほどのイケメン

真面目で曲がったことが嫌い

空に対してはやはり聖奈と同じ溺愛している

ヤバイときは影からひっそりと空を眺めることもあるためストーカ

一の疑いがある

次元を操ることが出来る為空間や時間すらも操ることが出来る基本的には勝負せず共最初から勝敗は決まっているのと同じ（但し空は破壊の力を使える為何とか出来る）

戦い方は紅と同じで超速攻派、但し能力で自分の時間も速めることも出来るため目で捉えることは不可能に近い

アルゼント・ユグドラシル

身長：180cm

体重：85kg

年齢：此方も同文

武器：原初の最初为天動『イグドラシル』
永遠の再生と破壊『ウロボロス』

白髪に黒目のダンディーな爺だが気合いさえあれば何でも出来ると
言い切る爺（クロウ結わくブラックホールを気合いで消滅させたと
か）

世界の創造者だが同じく世界のバクキャラでもある

世界神……次元神、創造神、破壊神結わく「「「あの人は全世界の
戦力で立ち向かって笑いながら圧倒できる」」」と言っている
能力は全ての始まりと終わりを司る……能力使われたらその場で全
てが終わりまた全てが始まる

戦い方は双大剣のオールラウンドでどんな状況、どんな場所でもあ
れど迅雷の如く速さと猛火の如く力で全てを圧倒する

修行相手は天空を司る龍と大地を司る龍！？（前書き）

相変わらずの駄文です

修行相手は天空を司る龍と大地を司る龍！？

紅「ん……んん」

人を捨て現人神になった次の日……紅は空に用意してもらった部屋は豪華でシャンデリアが多数の色を放ちながら紅を照らしていた

紅「すう……すう……」

紅はその光の中で落ち着いた寝息をしながら寝ていた……

ドンドン！

ドアからノックにしてはかなり五月蠅い強引な音が響く……紅もその音の影響なのかゆっくりと瞼を開いた

紅「ん……はい……開いてますよ」

ボタン！

起きたばかりの紅に喝を入れようと扉が勢いよく開いた

???「朝だぜ〜」

入ってきたのは燃える火の様な炎髪に太陽の様な灼眼のタキシードを着た人が仁王立ちが立っていた

紅「えつと……」

ティム「あつ……ああ！俺の名前はアカムトルマ愛称でティムってみんなから呼ばれている宜しくな！！！」

紅の前まで歩きティムは歩き握手を求めた

紅「えつ…あつ……はい！よろしくお願いします

紅はその行動に少し驚きながら何処か遠慮しながらティムと握手をした

ティム「かっつったいな〜空の行った通りだな！」

紅「空の知り合い？」

ティム「ん？いや……俺は空の使い魔だぜ」

自分の親指を自分に指差しながらティムは何処か嬉しそうに答えた

紅「空の使い魔はイクスさん以外にもいたのか……」

ティム「おう！俺以外にももう一人いるが……気を付けろよ」

紅「つつー！？」

ティムはぐつと自分の顔を紅の顔に近付けたティムは中性的な顔だがどちらかといえば女顔向きで更にあまり女性に慣れてない紅は頬を赤めたかなり動揺した

ティム「彼奴は俺が料理ができないくらいで鼻で笑い少し胸が大きいくらいで見せつけてくるんだぞ……！しかも彼奴は何時もいつも空様、空様って空の後ろにぴったりくっついてお前はストーカーか！？しかも彼奴はまったく冗談が効かねえしム力つくことがあったら俺を凍らすんだぞ！くくくううう……！！思い出してくるだけで腹が立つてくる……！！紅お前も気を付けろよ……！！」

紅「あつ……はい！」

あまりのマシंगाントークに紅は若手退いていた

ティム「そんじゃ行くぞ！」

紅「えっ？何処に」

ティム「食堂だ朝食だ飯だ分らないか？」

紅「主語が無いと分かりませんよ……」

ティム「ん？そうかそれは済まなかったな俺は部屋から出るから着替えが済んだら出てきてくれ案内する」

紅「ありがとうございます」

ティム「おう！どういたしましてだぜ」

ボタン！

ティムは部屋から出ていったその瞬間、部屋は静まった

紅「明るい人だったな〜」

紅はティムを待たせないと急いで着替えを済ました

「食堂」

ティム「ほら食堂ここが食堂だ」

紅「凄い……」

食堂は洋風で白いゴージャスな椅子と横長いが異常に長い机辺りには高そうな絵や壺が何個も飾られていた

ティム「スゲーだろ……俺も初めて見たときは驚いたよ」

紅「綺麗だな……」

ティム「そりゃ……俺とイクスさんがきっちり完璧に掃除しているからな」

うんうんとティムは腕を組み何度も頷いていた……そこへ

空「おはっよう」

???「おはようございます」

ティム「おはようだぜ空……後アリア」

紅「おはよう空……えっと君は」

空はメイド服を着た女性と一緒にやって来た

アリア「申し遅れました私の名はバイスロスト皆様からはアリア……と呼ばれております」

紅「紫乃崎 紅です（この人が……ティムさんが言っていた）」

アリア「……ティムに何か吹き込まれましたね？」

紅「ギクッ……」

アリア「まったく……あの野蛮人わ……」

ティム「何だと！いきなり凍らしてくる奴の方が野蛮人だ！」

アリア「貴方こと言語を慎みなさい我が主空様の前ですよ？」

ティム「てめえ……一度灰にならないとわからないか？巨乳天龍め……」

アリア「（ピクッ）……貴方こそ永遠に氷像にしてあげましょうか？……貧乳霸龍め」

ゴゴゴゴゴゴ！……！！

二人から莫大な魔力は放出されアリアの手から氷がティムの手から炎が現れ正に一触即発……

イクス「空様どうします？」

空「ほつところ……それより朝食用意して紅茶も宜しく」

イクス「かしこまりました」

紅「空……あれいいのか？」

紅の指差した方向には炎と氷がぶつかり合い……正に今ティムとアリアが死闘を繰り広げていた

空「何時ものことだよ……因みに紅の修行相手はティムとアリアだから」

紅「マジ？」

空「言つとくけどティムは大地を司る龍《轟覇龍皇》でアリアは天空を司る《天神龍帝》だから」

紅「……………」

紅は内心あの死闘を繰り広げているあの二人に自分は勝負以前に殺られないだろうかと恐怖していた

空「大丈夫死ぬことは一もないから……多分」

紅「空すまないがそんなことを言うなら顔を向けて言ってくれないか？」

イクス「紅様……あの二人はかなり強いので頑張ってください」

紅「イクスさんも此方を向いて喋ってくださいませんか？」

……

……

⋮

⋮

俺生き残れるのか？

ティム「アリア――――！！！！！！」

アリア「ティム――――！！！！！！」

対決！轟覇龍皇& a m p・天神龍帝VS幻影の現人神（前書き）

作者「戦闘ありますが下手くそですスイマセン……後感想などあればどしどし下さい……」

それに空も言っていたが『正直な話……神も人間もあんまり変わらないんだよね、ただ格が違っただけ』……とか言っていたんだよね

空『勝敗は気絶か敗けを認めた場合のみとします！！因みにティム……アリア……どちらかが紅に勝ったら明日にでも買物^{デート}に行ってもいいよ……』

ティム&アリア『キラーン！』

空『……！！！？？いまティムさんとアリアさんまるで獣のように目が光りましたよ！？しかも俺まるで獲物みたいに見られてますよ……あっ！ティムさん口から涎落ちています！！』『空、空とデート……クククク……』とか言ってますけど！？……アリアさん鼻から血が流れていますよ！！』『空様……空様と主と従者の禁断の恋……フフフフフ』アリアさん……正気に戻って……！！！

紅『………こう言うときこそ現実逃避がいいのかな？』

正直な話……既に目から光が無くなったあの二人に俺の勝機はまずないと思うんだけどな……

内心で十字架を描き空から譲られた宝具……轟く五星を構えた

フリューナク

ティム「すまねえな……紅、戦いと言うものは常に過酷なものなんだぜ」

肩から腕に掛けて突起状の針更に手は龍のような爪が生えてしかも腕全体が赤黒い鱗に覆われ足も鋭い爪が生え鉤爪が三本ある巨大な尻尾がある覇龍とかしたティムは拳を合わせながら言う

アリア「珍しくティムと同意見です……すみません紅様…私が空様とバーズインロードを共に歩むために……永遠に氷像となつてください」

アリアも頭に二つの斜めに生えて角、ティムと同じ様に腕と足に鋭い爪、薄青色の鱗に覆われたしなやかな尻尾更に蒼色の龍の翼持つ天龍とかしたアリアも頷いた

紅「何だろう……何故なんだろう……俺いつ死亡フラグを立てたっけ？しかも模擬戦だよね？これ模擬戦なんなんだよね！？」

駄目だこりゃ……もう決死の覚悟で………うん、無理だな

空「紅……絶体絶命だと思うけど頑張れ……」

何だろう……この俺の心から巻き起こる怒りは……奴を殴りたい……！

空『それでは……レディ………ファイト！……！』

ティム「速攻で決めるぜ！……！」

ガキンツ！……！

紅「……っ！……！」

ファイトと空が言った瞬間ティムは紅の少し真上に姿を現し強靱なその爪で紅に切りかかったが紅はギリギリの所でブリーナクでガードした

ティム「おらああ！……！」

紅「ガッ！？……！」

ドゴオオオン！……！

ティムはガードをした紅を力任せに吹き飛ばした紅は闘技場の壁まで一瞬で吹き飛ばされ体を叩きつけた………《轟覇龍皇》…アカムトルマ…その力は全てを圧倒する

紅「ぐっ……っ!？」

アリア「貴方の敵はティムだけではありませんよ？」

紅は壁に埋れた自分の体を抜いた瞬間、先程前まで闘技場の“真ん中”にいたアリアは紅の“後ろ”にいた

アリア「……凍れ『フリーズ』」

ビキビキビキ……

紅「うつ……!」

アリアが呟いた直後紅の左手は侵食されるように凍り始めた………天神龍帝…バイスロスト…その速さは何人も捉えることは出来ない

紅「（ヤバイ……魔法を詠唱する暇も）『考えている暇はあげない

ぜ！
『
∴
！
』

ティム「アリア事吹き飛ばせ！！！！」

爆炎衝爪破！！！！」

炎は巨大な刃と化しアリア共々紅に向かってきた

「アリア、彼奴め……」

アリアは持ち前のスピードでこれを何楽安全地点まで移動した……

バキバキバキ……！！！！

紅「あああああ！！！！！！」

紅はそれを正面から抑えた……紅は回避が出来なかったのだ……歴戦の戦士ならそんなことを容易に予想できただろう……だが紅はそんな歴戦の戦士では無いそもそも戦い慣れていないのだ……紅のもう一つの顔……夜天 零ならこの攻撃は回避できただろうが……既に夜天 零は存在しない……従って同じ肉体でも反応速度はまだ戦い慣れていなかった紅に戻ってしまったのだ

紅「ググググ……」

それでも紅の身体能力と才能に底は無い……

紅「だあああああ！！！！！！」

バキーーーーン！！！！

ティムが放った炎の衝撃波は打ち砕かれた……戦えば戦うほど強くなる……それが世界神の仲でNo.2の実力者で破壊神“夜天 空”の現人神……紫乃崎 紅だった

ティム「へっ……やっぱりそんな簡単に負ける奴じゃないか……」

アリア「ティム……仮にとはいえ空さまの現人神……最初から勝敗等付くわけも訳ありません」

ティム「だよ……なっ！！！！」

紅「……………」

ブオン！！！！

ティム「なっ！？」

ティムの一撃はまるで予知されていたように紅はギリギリの所で避けた

紅「（チャンス！）はああ！」

バキ！

紅はティムの懷に潜り込み鳩尾に掌底を叩き込んだ

ティム「ちっ！」

だがそれを詠んでいたティムはバックジャンプでギリギリ外れた

アリア「私の事も忘れないでください……《フリーズ・ランス》」

アリアの魔法が発動され紅の上空から幾つもの氷の槍が降り注いだ

……ティムも巻き込んで

紅「ちっ……」

紅は左手を凍らされているため両手が使えない為弾くのを諦めて正確に自分に当たる氷の槍だけを回避した……ティムは自らの爪で全て叩き落とした

ティム「アリア……!! てめえ……」

アリア「あらティムそんな所に居たんですか……すいません気付きませんでした」

ティム「……紅より先にお前を灰にしてやる……」

アリア「あら貴方ごときにそれが出来るのですか?」

バチバチバチ……

お互いの視線が火花を散らしいつの間にか標的は紅ではなく味方のはずのティムとアリア……お互い変わっていた

紅「あれ……？」

アリア「……降り注げ氷の槍！」
フリーズ・ランス

ティム「じゃらくせえ！炎獄突硬牙！！！」

前方に放出された炎の牙と降り注ぐ氷の槍はお互い相殺した

紅「（……俺、空気？……けど今なら空が言っていた“アレ”が使える！）」

ドクン！

己の心が

ドクン！！

己の力が

ドクン！！！！

己の幻影が

ドクン！！！！！

己の……………

ドクンン！！！！！！

己の鼓動が鳴り響く！！！！

紅「全てが幻影に沈み……………我が万物を掴む世界……………！」
イリュージョン・ワールド

紅から放たれる力……………幻影……………幻が世界を包む……………否、侵食していく

そして……………

空「紅……真の力を解放する準備は出来たみたいだね……」

月夜の夜……それが紅が作り出した世界の“幻影”そして紅の背後には……吸血鬼の象徴でも……あり不気味に光る紅い月……

紅「我が吸血鬼の血よ目覚めよ……」

《ファントム・オブ・バンパイア》
」

ゴゴゴゴゴゴ！！！

凄まじく漆黒の魔力が紅を包んだ……余りの魔力に観客は息をのみ
ティム達は自らの呼吸をすることも忘れたただ……美しくも禍々
しい漆黒の魔力に見惚れた

そして……

紅「……………」

それは姿を現した……

鋭く延びた犬歯

闇夜を象徴するような漆黒のコート

紅く血のような色に変化した腕

全身に黒い闇を連結させるような刺身

蝙蝠のような暗黒そのものような翼

そして……その手には鮮血に染まりに約束されし勝利の剣が握られていた
ブラッディエクスカリバー

紅「ッ……ヤハリ結構体ニクルカ……ティムサン、アリアサン、ス
イマセン……次デ………決メマス……!!」

ティム「……アリア」

アリア「……分かっていきます」

ティム「分かった……次で」

アリア「決めます!!!」

紅「真名開放!!!」

鮮血に染まった約束されし勝利の剣!!!
ブラッディエクスカリバー

ティム「轟け大地よ!!!
覇龍獄閻撃!!!!!!」

アリア「全ては魔氷に全ては終焉に砕く!!!
《アプソリュート・エンドレスゼクス》!!!!!!」

赤黒い、世界を切り裂く闇の極光と
大地を司る龍の全てを焼き尽くす爆炎
天空を司る龍の全てを凍らす神風

がぶつかり合い……そして……

ドガガガガンンンンンンンン！!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!

それはまるで宇宙が始まる爆発……それは恐らく何よにも力強く何よりも美しく何よりも……神々しかった

空「ホント……負けても何も言わないのに……よく頑張ったねディム、アリア………紅」

体の限界を優に越した戦闘を繰り広げた紫乃崎 紅は何もかもが吹っ切れた様な顔で静かに寝息で夢の世界に沈んでいた

幻影と破壊の旅立ち（前書き）

作者「今回か・な・り短いです更に今回の章で暫くの間この小説をやめます………すみません」

幻影と破壊の旅立ち

紅「……………」

俺が目覚めた場所は空が貸してくれた部屋だった

紅「俺は……負けたのか？」

吸血鬼化を使い鮮血に染まった約束されし勝利の剣を使ってからデ
イムさんの技とアリアさんの技がぶつかったあたりから記憶がない

フラッディエクスカリバー

コンコン……

紅「はっ……はい、開いてますよ」

ボタン！

空「お疲れ……紅」

力強くドアは開かれ入ってきたのは空だった

紅「空……」

空「いやゝゝまさかアレほどは……凄いな全く」

アレも才能なのかね……と最後につけたし空は呟いた

紅「そうでもないよ……ティムさん最初の一撃……並みの武器ならまずあれで壊されていたし……空がいい武器をくれたおかげで何とか出来たし……最後だってブラッディエクスカリバーが無きや確実にやられていよ」

空「ふむ……紅確かに武器の力に頼った所も少なからずあったけどそれは最終的にはそれを使った……自分自身の力だと俺は思っよ……紅は弱くない」

紅「……ありがとう“親友”」

空「どういたしまして“親友”」

紅「……クスクス」

空「……アハハハ」

それから二人は暫く雑談を楽しんだ

空「あつ……そうだ！」

紅「ん？」

空「実は……ちょっと俺これから引越しするけど紅も来る？」

紅「引越し？何処に？」

空「“地球”って言う今から代々今44億年前に生まれた星なんだけどね……中々いいところがあったんだ」

紅「いいのか？空も何だかんだ急がしそうだしここにはラーズディングさん達がいるじゃないか」

空「家出じゃないよ？引越したよ」

紅「まあ……分かるけど……」

空「因みに人は今のところ居ないみたい」

紅「そう……なんだ」

何だかどんどん話が強引になってきたような……

空「それで紅来る？別にここに残るなら父さんらへんに頼んでおくけど？」

紅「……………」

空「……………ダメ？」

空は少し前屈みになり紅を見上げるように見つめた

紅「／／／…っ！」

キャラクター紹介でも書いていたが空は男性ながら超が付くほどの女顔しかもとても可愛くそんな子に男性と知っていたいたも紅は思わず赤面し目をそらした

空「紅……？」

紅「分かった……分かったよ……付いていくから……」

空「やったー！！！」

不安げな顔をしていたのが嘘のように明るくなった

紅「……所でいつ行くんのだ？」

空「んゝゝゝ今日！」

紅「……はっ？」

空「紅は知らないけどあの模擬戦、紅は気絶しちゃって三日も目覚

めなかつたんだよ」

紅「マジかよ……」

空「真剣と書いた……マジと読む」

紅「分かった……荷物は……」

空「既に準備完了だよ」

既に空の手には紅の荷物らしきトランクケースが握られていた

紅「準備がいいな……」

空「時間は無限で無限に動くからね無限だからこそ俺は無駄遣いし
たくないんだ」

紅「イクスさん達は？」

空「ん？イクス達は」

パチンッ

イクス「空様……お呼びでございますか？」

親指と中指を合わせ鳴らすと一瞬でイクス達が姿を現した

紅「……………」

空「フフ……イクス達はかなり優秀な使い魔だからねこれぐらいは普通なんだ」

紅「凄いな……………」

ティム「な〜空〜準備は此方は出来たぞ」

アリア「空様、此方も準備完了しました」

空「オツケー……紅もいい？」

紅「はいはい……何処まで行きますよ」

空「それでは新たな地“地球”に出発！」

新たな地……地球……そこでどんな物語は綴られるんだろう……少し楽しみで少し不安だな……けど空達と一緒になら……何となるような気がするな……

幻影と破壊の旅立ち（後書き）

空「いきなり何で舐めるの？」（デュランダルを作者に向けながら）

作者「そっ……それは」

空「それに普通地球は44億年じゃなくて46億年だよバカだよね
バカなんだよね？」

作者「そっ……それは……」

空「もういやだこの作者に絶望した来て『エア』」

作者「嫌これには海にも深い深い……理由が……」

空「絶望を抱いて滅びよ……天地乖離す開闢の星……！」
エヌマ・エリシュ

作者「ギヤアアアアア……！！！！！！！！」

空「悪は……滅た」

紅「あの〰〰空？」

空「ん？何？」

紅「作者さんが言っていたんだけど44億年にしたのはある弾幕シューティングゲームを入れる為なんだって」

空「……………」

ポクポクポクポク……チーン！！

空「何だ〰〰そうだったんだ〰〰早く言えばよかったに〰〰」

紅「（あの時の空はまず話する余裕なんてなかったと思うんだけどな……）とりやえず作者からの伝言で新たな物語はまた別の小説に書くのでストーリー状の都合で暫くこの小説の更新をストップする

みたいです……………」

空「まっ…………とりやえず次の物語も宜しくね〜」

紅「暫くの間お休みです……………それでは」

帰ってきた神々（前書き）

作者「とりあえずこつちをこれから更新していきたいと思っています（
因みに紫乃崎 紅、夜天 零は零崎 紅夜、紅崎 紫零となっております）
ります）」

帰ってきた神〜

空「元界よ私は帰ってきた！」

紅夜「いきなり帰ったと思えば地球で見たネタ？」

あれから約一万ちよつとか？

とりあえず俺達は帰ってきた。

思い出せば色々やったな……ラグナロクに乱入にしたりトールの愚痴を聞いたりロキに騙されたりオーディンと何度か一緒に酒飲んだりフェンリルを討伐したり……何だろ大変な思いしかしてないよな。

空「どうしたの？紅夜？まさかいきなり地球に帰りたいとか言わないよね？」

紅夜「誰のお陰であんな神々の戦いに巻き込まれたけ？」

皮肉タツプリに言ってやる。

分かっていると思うがこいつの性でラグナロクに乱入にすることになったんだ。しかもこいつは自分の都合がいいときしか手伝わないと云うムカつくことをしてくれやがった奴だ。

まあ……こいつのお陰で最初の時と比べられないほど強くなったが

……

空「アハハハ」

ム力つく……とりあえずいつか一回ぶん殴ってやる

空「やれるものならね〜」

紅夜「……殴るじゃなくてこめかみにニヌルタかニヨルドをぶっぱなそうか？」

空「紅夜こそコヨーテかイシュチュルでバラバラになる？」

ニヌルタとニヨルド、コヨーテとイシュチュルは空と俺が地球で手に入れた銃を超魔改造した銃の事だ。

俺のはデザートイーグル・50AEに銃口を一つ増やして威力を底上げし弾を発射と同時に電気を纏わすことに成功したお気に入りだ……空からレールガンだとか騒がれたけど。

まあ……実際反動は普通の人が両手で撃っても腕がぶっ飛ぶが威力は一発あれば象を仕留められるけどな。

弾切れにも対応して魔力を弾丸の代わりに撃てるようにした。

空のは……性格が性格なのかマシンガンだった一応M11（イングラム）が元だったらしいが……何て言うかこれだけは言える……
……や・り・す・ぎ・だ！。

俺と同じ一つ銃口を増やすまでは一緒だったが発射速度が半端ない多分大型マシンガンでもこんなに発射速度は実現できないと思う。完成した時、実験に近くの木に発砲したらたった10発で撃った部分は残ってなかったしその時の空は……“ありよ？やりしぎた？”だったな。

……とりあえず俺のはまだ訓練した人なら撃てるか撃てないかな位だが空のは駄目だ。

人が撃ち始めたら腕の筋肉所が骨が粉々になる……正に破壊神らしい銃だ。

紅夜「……………」（腰のホルスターに手を置く）

空「ニコニコ♪」（後ろ腰のホルスターに手を置く）

……………

……………

……………

……………

……

アルゼント「ご苦労、イクス……所で“例”の物は？」

イクス「はっ……ここに」

イクスが取り出したのはアルバムのようなものだった

アルゼント「ほほお……いい顔じゃ……グフフ」

聖奈「あ……！それ空の寝顔写真集最新版！

イクス……私の分は！？」

イクス「はい……聖奈様の分も此方に」

聖奈「やったー！

ありがとうイクス♪」

クロウ「……すまないイクス？……お、俺の分は？」

イクス「クロウ様の分も此方に……」

クロウ「ありがとう。イクス流石いい仕事をする……」

ティム「いいな〜俺も空の寝顔写真集最新版が欲しいぜ！……！」

アリア「あら？ティムさんは持っていないのかしら」

ティム「うるせえな……」

アリア「フッフ……従者は常に主のお側にいるもの…貴方にはそんな簡単なことが出来ないとは……」

ティム「何だどおおおお！？」

アリア「私なら例え地獄、天国、宇宙の中でも空さまに着いていきますわ……例え空さまのベッドの中でも……！」

ティム「Σ！？。まつまさか貴様！？」

アリア「フッフ。襲いはしませんよ？

けど寝惚けて空さまが抱きついて私の胸に顔を埋めたときは……あ

イクス「……はい」

とても……つつとも……

帰ってきた神々（後書き）

作者「とりあえずこつちをちよくちよく更新していきたいです」

紅夜「空の機関銃は駄目だ……ひとなら肉塊所か血しか残らないぞ？」

作者「いや（汗）紅夜の超電磁砲は本気で撃てば血所が焦げた後しか残らないよ」

イクス「どちらも食らえばひとたまりもありません」

作者「いいツツコミありがとうイクス」

紅夜「なあ、作者これからどうするんだ？」

作者「一応、候補は一次創作だな。まずはそれから」

紅夜「へへへ」

作者「そっぴや空に使い魔が三人も要るんだし紅夜も要る？使い魔」

紅夜「そうだな……確かにイクスさんみたいな使い魔は欲しいと何
度か思ったときはあったな」

作者「んゝまあ…それは後回しの課題として……」

紅夜「俺のお決まり台詞もまだ考え中なの？」

作者「……………」

紅夜「あれ？作者が一瞬にしてオーバーヒートした
とりあえず……次回もお楽しみに？」

命を懸けた鬼ごっこ？ 前編（前書き）

作者「誠に申し訳ありません。テストなどの理由により更新をストップさせていただきました。

これから少しずつ更新して行こうと思っています。

そして誤字、脱字等ありましたらご報告をお願いします」

命を懸けた鬼ごっこ？ 前編

曇り一つない青空……

今日も今日でいいことがあると信じた……いや信じていた

けど、そんな希望は直ぐ様、絶望に染まり

俺は今………

紅夜

「たゝすゝけゝてゝ……!!」

謎の生き物

「ガアアアアアアア……!!……!!」

謎の生き物に追い回されています。

その生き物は……何処と無く竜みたいな生き物なんだがそれと同時にナマズみたいな生き物……そしてその生き物は異常に口がでかいどのくらいデカイかと言うと大の大人がピンと縦に立っていても容易に飲み込んでしまうくらいデカイ……あれに飲み込まれたら俺どうなるんだろうか……アハハハ……

空

「頑張れ～～現実逃避するな～～！」

紅夜

「なら、お前が、やれ～～～！」

空は鱗が真つ赤な竜に乗り俺を下から身を下ろしていた。

何故俺がこんな鬼ごっこ（命懸け）をしているのかは、ほんの一時
間前に遡る……

紅夜

「管理世界？」

空

「そつ、管理世界、管理世界は世界神だけが管理する世界のこと」

紅夜

「へっ……で？」

空

「ノリが悪いなっ一緒に行かないかと言ってんの……どうせ暇でしょ」

紅夜

「確かに暇だが……お前が絡むとどうしても災厄な出来事になりそうだから却下」

空

「……面白いところだよ？」

紅夜

「その言葉を信じて着いていったときは超古代の遺跡だったなしかも超科学でトラップが半端なくて何度か死んだな」

空

「……楽しいところだよ？」

紅夜

「その言葉を信じて着いていったときは星を喰う巨大な化け物と闘ったな……しかも修行とかで体にリミッター付けられメチャクチャ苦労したな」

空

「……ワクワクするところだよ？」

紅夜

「……それが一番酷かったな。確か冥界の中でも一番恐ろしい所で一発だけで星をぶっ飛ばす龍と殺り合った……アレ、闇の刻印使つてまでも互角だった……名前はバハムートとか言ってたっけ？……因みにソイツと殺り合った時は1000回以上死んだな物理的に」

空

「いや〜。それに関しては本当申し訳ないと思うよ。アハハハ…」

紅夜

「それ‘だけ’の間違いじゃないか？」

空

「……………」プイツ

紅夜

「よそを見るな！」

空

「えええい！。最終手段！『強制連行』！」

紅夜

「へっ？。ちよつ、まっ「待ったは無し！」……理不尽だあああああああ！……！」

こうして俺は空が真下を開けた空間により全く反抗できないまま俺は落ちた

紅夜

「そして、この、有り様だ〜！〜！」

俺が落ちた場所はなんのヘンテツも無いただの砂漠であつただ空が落とした時、受け身も出来ないまま地面に叩きつけられると思つたが丁度その謎の生き物の背中に激突し謎の生き物はお昼寝タイムだつたらしく大激怒して俺を襲つてきと言うべきだ……不幸だよなこれ？

空

「速さが落ちてきたよ〜〜。喰われちゃうよ〜〜？」

紅夜

「御託はいいからとつと助ける〜〜！」

空

「いやここはあの‘名言’を言えば助けてあげるよ♪」

紅夜

「アホなこと言つてないで助ける！
そして俺はそんな名言は知らん！！！！」

空「それじゃ……今から教えるよ

まず……右手を丁度右耳位の高さまで上げてそのまま左脇腹まで降り下ろす！

そして決め台詞は『助けてえ〜りん！』と……！』

紅夜

「この……友人の命の危機なのにそれを見て喜ぶドSが……！』」

空

「いや〜まだまだ幽香先生にまでは及ばないよ」

紅夜

「先生！？ 初耳だぞそれ！ そして幽香さんは一体空に何を教えているんだ〜！！！！……？？」

そして俺は誉めてねええええ！！！！」

命を懸けた鬼ごっこ 後編（前書き）

作者「投稿します。相変わらず短いです。そして今回で鬼ごっここの結果が出ます」

命を懸けた鬼ごっこ 後編

逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて……その先に何があるだろうか？

その先には希望、絶望があろうと俺は……俺は……俺は……

生きたいんだ

空

「と、シリアスな空気を描いてみたけど……どう？」

紅夜

「結構いい空気だったがお前の言葉で見事にブレイクだ……！」

空

「ぶ〜。これでも少しは考えたんだけどな……」

紅夜

「もう、どうでも、いいから、早く、助けて〜！」

謎の生き物

「ガアアアアアア！……！！！」

ヤバイ！バハムートよりはましたがマジで食われる！

空

「もう少し弄りたかったけど……ハプルボツカに紅夜を喰わされると体を壊すからね……」

紅夜

「！？　おい！！　そっちか！？　俺の方じゃなくて　そっちか！？」

空

「何言つての“当・た・り・前”だよ。代々紅夜は不老不死なんだよ？。どうせ喰われても復活するから心配無用だよ」

紅夜

「俺達、友達だよな！？ 親友だよな！？ 何だ！？ まさか一年前のお前のプリンを間違って食ったのをまだ根を持っていたのか！？」

空

「……気ノセイダヨ…僕八君ヲ心カラ許シテイルヨ………アハハハハハハ」

紅夜

「動揺がまる分かりだ！　そしてまだ根を持っていたのか！？」

それを空が聞いた瞬間……空の空気が変わり。微笑んだ

空

「紅夜……」

それはまるで……

空

「食べ物の怨みは……」

悪魔のような……

空

「恐ろしいんだよ……殺れ　ハプルボツカ」

処刑を下す冷徹な微笑みだった

ハプルボツカ

「ガアアアアアアアア！……！！！！！！」

一際大きな咆哮を上げてハプルボツカと呼ばれた生き物は砂を大量に吸い込みだし……

ハプルボツカ

「フウウウウウウウウ！……！！！！！！」

紅夜

「あつ……ヤバ」

大量に吸い込んだハプルボツカをそれを思いっきり吐き出した。
それは巨大な砂塵の竜巻となって紅夜に襲った

紅夜

「……口は……やっぱ災いの元だな……」

ハプルボツカVS紅夜

勝負内容：鬼ごっこ

鬼：ハプルボツカ

逃げる側：紅夜

勝者：ハプルボツカ

報酬：こんがり肉G×10個

終了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8614m/>

世界神の楽園物語

2011年6月24日16時19分発行